

乙女高原が好き！2403号

夏の賑わいから静かな秋へ

たくさんの花々（鹿柵設置以降、花が増えてきましたが、今年もさらにいろいろな花が増えてきた感じ）が次々に咲き、昆虫たちもたくさん活動した夏の乙女高原。お花を見に、チョウやマルハナバチの観察に、また涼を求めて多くの人々がやってきました。そんな乙女高原は9月に入り、一面のススキ原になっています。夏の花は枯れて実をつけはじめ、秋の花も咲き始めました。昆虫たちは徐々に少なくなって、静かな乙女高原になります。これから草紅葉や木々の紅葉黄葉も始まります。冬に向かう前の輝きも素敵な乙女高原に足を運んでみてはいかがでしょうか。

新しい案内人が誕生しました！

本年度、16年ぶりに乙女高原案内人講座が開催されました。今回が第5期です。23人の方が3回の講座を受講され、3回目の講座終了後に、修了証と案内人のワッペン、名札をお渡しして、新案内人となりました。これから、乙女高原の自然を次世代につないでいくために、乙女高原ファンクラブのさまざまな活動を共に盛り上げてほしいと期待しています。

●乙女高原案内人養成講座・最終日●

7月28日（日）

記事：植原 彰

いよいよ7/28に養成講座最終日（3日目）が行われました。メインは小松澤さんによる「乙女高原の植物～樹木」と井上さんによる「乙女高原の植物～草花」という二つの野外実習です。お二人とも紙芝居のようなものを準備して、受講者の理解を助けていました。

小松澤さんは、樹木に関する様々な専門用語をカードにして示してくださいました。「ケーサーソー」「コーゴサー」など、専門用語ってカタカナでしか耳から頭に入っていないことが多いのですが（これって、自分だけでいいですか?）、漢字は意味を伴っているので「形成層」「光合成」というカードを見ると、がぜん理解度が上がります。そんな工夫をしながら、樹木・森林についての理解を促してくださいました。

一方の井上さんは植物名を漢字で書いたカードを用意してくださいました。植物名はカタカナで書くというルールがありますが、植物名には由来があります。カタカナだとそれがわかりにくいので、たとえば、私はクサレダマという植物名をずっと「腐れ玉」だと勘違いしていました。正しくは「草・連玉」です。あ、この植物、乙女高原にはありません。

井上さんのカードには、「剃刀菜・顔剃菜」とか「大葉擬宝珠」とか書いてありました。それぞれコウゾリナ、オオバギボウシです。

このような楽しい実習でした。時間が過ぎるのがあっという間でした。

この日は、午前中の実習が終わったあと、ワークショップ。少人数に分かれ、乙女高原での活動についてお一人お一人の意見を発表しあったりしました。そして、午後の実習が終了後は、修了証やワッペン、名札をお一人お一人にお渡しし、閉講式を行いました。

案内人の皆さんはこれまで3回の講座では「活動のために学ぶ」期間でしたが、これからは「活動しながら学ぶ」期間となります。皆様のご活躍を期待しています。乙女高原の自然を次世代に譲り渡すために、いっしょに活動していきましょうね。

※新案内人の槇田幹夫さんから感想をいただきました。

今回の講座3日目は、6/9の前回に比べて乙女高原には色とりどりの花が咲いていて、一層楽しく実習でき



ました。講師、スタッフの皆様ありがとうございました。

講師の方は事前に下見をして、紙芝居風に説明資料を準備されていたので、実物と比較しながらポイントが理解できました。写真より手書きの図解の方が説明ポイントを伝えやすいですね。私も見ながら自然観察会で使ってみたいと思います。

樹木の説明では、普段見る機会が少ない樹木の花や実・種子の実物（標本）があれば最高でした。松や杉と同じように、白樺や唐松の種は意外と小さいのではないかと想像しています。

草原を守る草刈りボランティアへのご参加を！

今年も乙女高原の草原には100種類以上ものたくさんの花が咲きました。そして、その花や植物にはいろいろな種類のチョウやハチなど多くの昆虫たちを見ることもできました。さまざまな野鳥や野生動物もやってきます。生き物のつながり、生物多様性が乙女高原では見られます。このような貴重な乙女高原の草原を維持していくためには、草刈りが必要です。人の手で維持していかないと、この草原は森林になってしまうのです。

今年も例年のように11月23日（土/勤労感謝の日）に第23回乙女高原草刈りボランティアを行います。多くの皆様のご参加をお待ちしています。（詳しくは同封のチラシをご覧ください）

草刈りをしながら、「カヤネズミ？の巣」を探しましょう。9年前の草刈りボランティアの日、ススキの根元に半円球形の巣が見つかり、カヤネズミの巣ではないかと話題になりました。その後、巣をほぐして中の糞をDNA分析してみたり、トラップ（わな）を仕掛けてみたり、そのわなに入るネズミを写すようセンサーカメラをセットしたりしていますが、いまだにカヤネズミがいるか・いないか決着がついていません。カヤネズミは草原をすみかとするとても小さなかawaiiネズミです。もし、乙女高原にカヤネズミが生息していることが証明できれば、日本最高標高となり、大発見です。ススキの茎にソフトボール大の球形の巣がぶらさがっていたり、ススキ株中央の地面に半円球形の巣があったら、ぜひ教えてください



2023年の草刈ボランティア
記念写真撮影を横から見ると。



2020年12月に乙女高原で井上さんが見つけたカヤネズミがもしれない巣

小学生と乙女高原で観察

●笛川小3年生の案内●

6月26日（水）

記事：渡辺和男

乙女高原のロッジ前にバスが到着しました。「乙女高原自然学習」で訪れた地元・笛川小3年生の21名が降りてくると、乙女高原が一気ににぎやかになりました。早朝から山道をバスに揺られてきたので疲れているはずですが、乙女高原の風景と空気に触れて気分が高揚している様子です。

はじめの会では、引率の先生方、案内役のファンクラブのメンバー6人が1人ずつ挨拶をしました。元気な子供たちを前にしているからでしょうか、いつもよりメンバーの声のトーンが高いと感じたのは私だけではないでしょう。今回の自然学習のテーマは「昆虫」です。子供たちは、植原さんから事前に説明を受けていますので、私としては積極的に説明するというより、あくまでも子供たちの自主観察にまかせることにしました。子供たちからどんな質問がくるのかわからないので不安がいっぱい。「出たところ勝負」です。4つのグループに分かれ、それぞれ2人の案内役が付き添います。私は篠原さんと一緒に5人の子供達と歩くことになりました。

シカ柵内へ入り森のコースへ進みます。私が先導、最後尾は篠原さんです。子供たちは事前に自分で記入した昆虫、木、花のビンゴカードを用意していて、見つけたらチェックするみたいです。自然観察のきっかけ作りには良いかもしれませんが、ビンゴゲームに固執してしまうと、本来の「自然観察を楽しむ」という目的を見失うかもしれません。まあ、細かいことは抜きにして早速観察開始です。イタドリの葉が細長く丸められて下がっているのが多くみられます。事前学習で興味を持ったのでしょうか、子供たちは「オトシブミ」を見つ

きたい様子です。金緑色に光る「チョッキリの仲間」は頻繁に見かけました。森の中に入るとギンリョウソウがたくさん咲いていました。ミズナラの木の下では、拾ったどんぐりの帽子を頭に乗せている子もいました。そういえば小さな子がかぶる「どんぐり帽子」に似ていますね。木陰の木の幹にエゾハルゼミの抜け殻がついていたので、観察用に持ち帰ることにしました。



コースの中ほどの草原が見渡せる場所で、後ろの子供たちから「マルハナバチだ」と声が上がりました。すぐに戻って種類を確認しようと思ったら、すでに飛び去ってしまった後でした。今日は半袖では肌寒くて日差しも少なめのため、出会えるとは思っていなかったのうれしい誤算です。かわいい姿をしたマルハナバチは乙女高原の人気者なので、出会うとうれしくなります。

展望台の手前ではエゾノタチツボスミレが咲いていました。乙女高原のスミレの中でも一番遅くに見られる背の高いスミレです。すでに周囲の草の背丈が高くなっている時期なので、それに負けじと茎をのばして花をつけています。サクラスミレの花を探している子もいましたが、もう残ってはいませんでした。

展望台で荷物を下ろし、休憩と水分補給をしました。残念ながら富士山は雲に隠れて見えません。この先のブナじいさんを見たいという意見もありましたが、観察時間と子供たちの体力を考えてここまでとしました。

展望台から草原のコースへ向かいます。眼下にロッジの赤い屋根を見通すことができる場所で立ち止まり、斜面に点々と見えるヤマドリゼンマイの群落を、「ミステリーサークル」のようだと説明しましたが、あまりピンときていないようでした。世代間ギャップは思ったよりも大きいようです。「UFOの基地」と言い換えたらピンときたようで、「夜になったら地面からUFOが出てくるかも」とか「地底人が住んでいるのかも」と興味津々の様子でした。草原のコースの中腹で、イケマの葉に群がる「ヒメジュウジナガカメムシ」を見つけたので、みんなで観察しました。その中で「おしりとおしりがくっついているのはなぜ？ べとべとしているから？」とか「小さいほうがメス？」といった質問が出ました。

最後に、ロッジへ戻る前にツツジのコースへ様子を見に行きました。期待していたマルハナバチは見られなかったのですが、丸まったイタドリの葉の中に、数頭の「チョッキリの仲間」が入っている様子が見られたのでよかったです。ロッジへ戻り、おわりの会をして終了となりました。

「乙女高原の自然を次の世代に確実に譲り渡す」。今回はまさにそんな活動でした。もし機会があれば、また参加したいと思います。みなさんも一緒にいかがですか。

●日下部小4年生の案内●

9月3日(火)

記事：宇津貴史

案内人になってはじめての引率者。専門の分野とはいえ、台風一過。チョウがいてくれるか不安で、7時半に着き、高原を3周しました。アサギマダラがゆっくり風に乗っていて、このタイミングで小学生のみんなを迎えられたらよかったのにと、ちょっと残念な気分になりました。



みなさんと高原に入ります。キアゲハの幼虫を手に載せて観察します。一生懸命スケッチしてくれました。観察できたヒョウモンは5種。ギンボンヒョウモンとウラギンヒョウモンはとてもよく似ています。ミドリヒョウモンはオス・メスのペアでアザミに来ていました。

ウラギンスジヒョウモンはなかなか珍しい種で、標高の低いところには降りて来ません。ツマグロヒョウモンは温暖化の話にもつながりました。その他、ホシミスジの飛翔観察、植物移入の問題点(都区内には公園に植えられる食草についてきた、ホシミスジの近畿亜種が増えている。乙女高原にいるのは中部亜種)、写真を利用してクジャクチョウやコムラサキの翅の構造色を学びました。

みなさん、興味津々に聴いてくれて、こっちも楽しかったです。

そして最後にアサギマダラが歩いている前方からやってきてくれて、本当によかった。

集合時間まで残り3分しかないのに、もう一度キアゲハの幼虫を観察したいとのリクエストに応え、ぎりぎりまで楽しんでくれたみなさんに感謝！

なにより、天気もってくれたことに感謝です。チョウ観察には気温と天気が重要ですからね。

記事：伊佐治庸子

案内人講座も受けていないのに子供たちの自然体験学習に参加させていただいたのだから、心に残る出来事

はいっぱいあるはずなのですが、実は、一番印象に残ったことは、谷地坊主の観察を終え、グリーンロッジに戻ってからの出来事でした。

テーブルを囲み山梨中央銀行の懸賞チラシの乙女高原スキー場の写真を子供達と見ながらまったりしていた時です。「バカ」「ばかだ!」「バカバカ」と子供たちの声がします。「え〜っ!こんな小さいバカ!」と先生の声もします。「何言ってるんだろう?」と最初ピンと来ませんでした。声のする方へ行ってみました。見ると男の子のズボンに小さい小さいひつつき虫がくっついていました。ヒメキンミズヒキの実のようです。

(ああ、コジキのことか。)

谷地坊主先生の引率の先生が甲府のご出身であることは、観察に出かけている間に聞いて知っていました。それでひつつき虫のことを「バカ」と言っていたのかと納得しました。ところが子供たちは日下部小学校なので山梨市のお子さん達です。山梨市あたりではひつつき虫のことを「コジキ」と呼んでいると思うのです。ですが、その場にいた全員が「バカ」と呼んでいました。

私の心の中は(?)でいっぱいになってしまいました。先生の影響で「バカ」になったのか。時代が変わり今では山梨市でも「バカ」と言うようになったのか。この謎が解けないとどうにもスッキリしません。

どなたか真相をご存じの方がおられましたら是非教えて下さい。

● 笛川小3年生の案内 ●

9月4日(水)

記事: 鈴木辰三

9月4日、笛川小3年生の乙女高原自然学習が行われました。6月に続いて2回目です。今回は事前に「マルハナバチの観察がしたい!」と具体的な要望があったため、「マルハナバチ調べ隊」午前中のプログラムを取り入れることにしました。とは言え通常の調査票を使うのは少し難し過ぎます。記録する内容をシンプルにした「子ども用バージョン」を用意しました。

朝9時20分、21人の生徒と引率の先生4人を乗せたスクールバスが予定通りに到着。お迎えする案内人は6人。3つの班(1班:加藤さん・鈴木、2班:角田さん・荒井さん、3班:楨田さん・植原さん)に分けて調査を行います。最初にマルハナバチについて説明を行い、恒例の紙芝居は加藤さんと楨田さんがアドリブを交えて実演しました。



いよいよ調査開始、3班が同じコースを歩くので50mほど間隔を空けてスタートします。開始早々ノハラアザミに“みーちゃん”を発見。その後も次々にマルハナバチを見つけては、調査票に記録します。最初は戸惑っていましたが、花粉団子の有無・蜜を吸っているかなど徐々に要領を得てきます。ハバヤマボクチの花に6頭もの“トラ”がひしめき合って蜜を吸っている様子に、みな大興奮! その他、虫こぶやオトシブミを観察したり、偶然にもキアゲハの産卵シーンに出逢うというオマケ付きで調査終了。

1班では最終的に40頭のマルハナバチを観察することができました。約3分の2がミヤマ、残り3分の1がトラでオオが2頭という内訳です。花の一番人気はタムラソウ、ノハラアザミ・ヤマハギと続きます。

すべての班が調査を終えてロッジに戻って来ると、マルハナバチに関する質問コーナーが待っていました。生徒たちの疑問に案内人が答えるというものです。

「どうして毛むくじゃらなの?」「元々はどこから来たの(起源)?」「働きバチの寿命は?」などなど…。

専門家でも回答に困りそうな難しい質問を投げかけられ、案内人がタジタジとなる場面も…。子どもたちの発想にはいつも驚かされます。

自然学習を終えて生徒たちがバスで帰った後、角田さんが用意してくれた本格的エスプレッソを飲みながら1日の振り返り。今日の子供たちが自然の魅力を感じて、また乙女高原を訪れてくれると嬉しいですね。



今年もたくさんさんのマルハナバチに出会えたよ♡

● マルハナバチ調べ隊～初夏編 ●

6月30日(日)

記事: 楨田幹夫

勝沼ICからは乙女高原方面の山は雲の中で見えない。天気が雨模様で果たしてマルハナバチが観察できるかどうかの一抹の不安を抱きながら、乙女高原へ続くクリスタルラインを車で走る。10時の集合時間前に乙女高原の「グリーンロッジ」に到着。3週間前はオレンジ色のレンゲツツジが沢山咲いていたのに、今日は緑一色の草原。マルハナバチが訪れる花があるのか、予習を兼ねて森のコースを通過してヨモギの頭に上り草原コースを下ってロッジに戻る。草原に沢山あるオオバギボウシやヨツバヒヨドリ、シモツケソウはまだ蕾だったが、

ヤマオダマキやノアザミが咲き出し、アヤメもあちこちに咲いていて、マルハナバチも数頭観察でき、初めて参加する「マルハナバチ調べ隊」は期待できそう。

10時の集合時刻になり、スタッフと参加者が集まり「マルハナバチ調べ隊」が始動。雨の天気予報のためか、スタッフと参加者合わせて10名ほどで、子供の参加が1人だけです。昼頃から雨の予報なのでスケジュールを変更して、草原の遊歩道を歩いて、どんな花にどんな種類のマルハナバチが来ているかをカウントする『ラインセンサス調査』に早速出発することにしました。記録シートの記入方法の説明を聞いて、調べ隊の出動です。



草原に入ってまもなくアヤメの花を訪れるマルハナバチを見つける。黄色い網目模様がついた大きな花びら〔外花被片〕とその上の小さな花びら〔雌蕊の一部分〕の隙間に潜り込んでいく。後ずさりしながら隙間から出てくる格好が面白い。三か所ある隙間に潜り込んで次の花に飛んで行くので、なかなか写真が撮れない。

先に進むと、ノアザミの花の蜜を吸っているマルハナバチがいました。この花は蜜がある小さな花〔小花〕が集まっているつくりなので、マルハナバチが一つの花に長い時間留まっているので、写真に撮りやすい。

途中で小雨がぽつぽつと降りだしてきましたが、けっこう活動しています。遊歩道から離れた花に来ているか双眼鏡で探しますが、なかなか難しい作業です。見つけたらすぐに種類を識別しないと、視野から消えてしまいます。

今日は、トラマルハナバチが10頭、訪れた花はアヤメとノアザミの2種類でした。

グリーンロッジに戻り一休みしたらマルハナバチについての学習です。スタッフの皆さんが作成した『紙芝居』を使って、マルハナバチの特徴や個体によって担当する花が決まっている習性、雄蕊の花粉を運んでもらって、他の花の雌蕊が受粉する花とマルハナバチの共生、春に女王バチがネズミの古巣など地面の中の空間に巣を作り卵を産んで働きバチを育て、秋には翌年の女王バチと雄バチを産み育てるマルハナバチの一生などなど、小学生にも理解できるほど分かりやすく説明して頂きました。ありがとうございます。

今回は、雨の為『まちぶせ調査』は実施できませんでした。また午前中の『ラインセンサス調査』ではトラマルハナバチの1種類だけでした。色々な種類の花が咲き出す8月3日の盛夏編に期待が高まります。とらちゃんだけでなく、おーちゃんやみーちゃんにも会えて、後ろ足に大きな花粉団子をつけツリフネソウやトリカブトやリンドウの花に潜り込み後ずさりしながら出てくる可愛い動きをじっくり観察したいものです。

代表世話人の植原様を初めスタッフの皆様、ありがとうございました。

●マルハナバチ調べ隊・盛夏編●

8月3日(土)

記事：植原 彰

いい天気でした。参加者はなんと30人。夏はたくさんマルハナバチに出会えますが、それにふさわしい大人数でした。

はじめのあいさつ後、いつものマルハナバチ紙芝居です。その中の「マルハナバチの一年」の部分は、裏にセリフが書いてあって、「初参加ではないお子さんに読んでもらう」慣習になっていました。今回は、6月の調査にも親子で参加してくれたしゅういちくんを読んでもらうことにしました。案内人の松澤さんにサポートされながら、上手に紙芝居を読んでくれました。



午前中は、「決められた遊歩道を、決められた時間(1時間)で歩いて、出会ったマルハナバチを記録する」というラインセンサス調査です。遊歩道に入ったとたんに、たくさんマルハナバチが出迎えてくれました。オオバギボウシの花を次から次へと訪れるトラちゃん(トラマルハナバチ)、小さなヤマハギの花が得意なみーちゃん(ミヤママルハナバチ)などです。あっという間に調査票が埋まっていきました。

珍しい場面としては、ヨツバヒヨドリにオーちゃんやトラちゃんが来ていました。ヨツバヒヨドリは小さな花が上向きに集まって咲いているのですが、よく見ると、マルハナバチは花の中に舌を差し込むことなく、ただ花々の上をせわしく動き回っているだけです。これは、マルハナバチが花粉を集める行動です。まるで掃除機で部屋のほこりを集めているみたいです。もう一つはワレモコウにミヤママルハナバチが来ていたことです。おそらくワレモコウにマルハナバチが訪れているのは初の観察記録だと思います。



結局、ラインセンサス調査で84頭のマルハナバチを記録しました。内訳はトラマルハナバチ56、ミヤママルハナバチ25、オオマルハナバチ3です。訪れていた花は12種類。ベスト3は、オオバギボウシ23頭、クガイソウ18、ノハラアザミ11でした。

6月の調査ではトラマルハナバチのみ10頭でした。9月の調べ隊ではどんな結果が得られるか楽しみです。

午後は、ラインセンサス調査の速報値を報告してから、待ち伏せ調査を行いました。調査員それぞれが選んだ花の前で15分マルハナバチが来るのを待ち、記録するというものです。15分を2回やっていただきました。複数の調査員でやっていますから、多くの調査員が同じ花を選ぶこともあります。そこで、待ち伏せ時間を60分換算にして比較しました。すると、第1位はシモツケ40頭、2位ヤナギラン32、3位クガイソウ22でした。

●マルハナバチ調べ隊・初秋編●

9月7日(土)

記事：井上敬子

今年度3回目、秋のマルハナバチ調べ隊が9月7日に行われました。

乙女高原は、この季節、一面のススキ草原になります。花はなさそうですが、遊歩道を歩くといろいろな花があります。夏にはたくさん咲いていた花は実になっていたり、もう終盤だったり、寂しい感じですが、まだヤマハギ、タチフウロ、ノハラアザミ、アキノキリンソウ、タムラソウ、マツムシソウ、ゴマナなどが咲いています。ハバヤマボクチやセイタカトウヒレンは咲き始めたばかりです。こんな時期にはマルハナバチはいるのでしょうか。

朝10時に集まったのは17名。始めの会では、最初に、一人だけ参加してくれた小学生の修一君と案内人の松澤さんが「マルハナバチの一生」の紙芝居をじょうずにしてくれました。次に井上がマルハナバチの特徴と種類を簡単に説明、三枝さんが調査のしかたの説明をしました。午前中はラインセンサス調査です。決められたコースを1時間程度で歩いて、どんな花にどんなマルハナバチが来ているかを調べるものです。3つのグループに分かれて、歩くことにしました。天気は薄曇り、気温は20℃、下界はこの日も真夏日とのことですが高原は、涼しくさわやかです。でもこんな気温、天気では、マルハナバチは出てくるのか少し心配しながら、草原に入りました。

でもそんな心配も杞憂で、草原に入ると、さっそくヤマハギにミヤママルハナバチ(ミーちゃん)、タチフウロにも、アキノキリンソウにもという感じで、たくさんマルハナバチが姿を見せてくれました。私たちのグループには初めての参加者が2人いらっしゃったので、じっくり見たり、説明したりしているうち、他のグループにだいぶ遅れをとってしまいました。でもちょっと立ち止まっていると、次々にマルハナバチがくるので、なかなか進めません。ノハラアザミやタムラソウにはミーちゃん以外にトラマルハナバチ(トラちゃん)も。また、数は少なかったけれどオオマルハナバチ(オオちゃん)もいました。初めてのお二人もかわいいと言いながら写真を撮っていました。



ツツジのコースに入ると、ハバヤマボクチが咲き始めていて、そこにはトラちゃんが4、5頭もひとつの花に潜り込んで蜜を吸っています。足には大きな花粉団子をつけています。蜜がたくさんあるのでしょ。長い時間、蜜を吸っていました。

調査用紙を2枚しかもっていかなかったので、途中で記録する場所がなくなってしまい、欄外に書いたりして、集計してみたら80頭くらいカウントできました。多かったのはミーちゃんでした。また夏と違って、花粉団子をつけていないハチもかなりいました。もう巣に幼虫はおらず、子育てをしていないということでしょう。また、ミーちゃんはとても小さい個体やオスカなどと思われる美しいクリーム色の個体もいました。今年のマルハナバチの活動も終わりに近づいているのでしょうか。12時近くにロッジに戻って(他のグループをだいぶ待たせてしまいました)、集計をして、12時過ぎにやっと昼食となりました。

午後は1時から、待ち伏せ調査です。新たに4人の方が調査に加わりました。やり方の説明を聞いてから、各自、草原に入って、気に入った花の前で15分間、じっと見て、どんなマルハナバチが来て、何をするかを調べます。これを2回行いました。

私はラインセンサス調査の時、アキノギンリョウソウの下にトラちゃんが来たのを見かけたので、アキノギンリョウソウが咲いているところに行きました。この花の受粉をマルハナバチがするのか、見てみたいと思ったのです。でもトラは2回、花の根元には来ましたが、花にとまることはありませんでした。残念・・・次にノハラアザミのところまで待ちました。15分間にミーちゃんが6回、蜜を吸いに訪れました。



ロッジ前に戻って、各自の調べたものを集計です。それぞれが調べたものを報告してもらい、合わせて1時間単位に換算しました。その結果、マルハナバチに人気の花、ベスト3はタムラソウ、ヤマハギ、ノハラアザミでした。やはり、ミーちゃんが一番多く、次がトラちゃんでした。オオちゃんは数頭でした。

参加者も多く、マルハナバチが沢山いて嬉しかったです。さわやかな草原での楽しい一日でした。

どんな昆虫がどの花にやってくるのかな？

●訪花昆虫調査 6月●

6月15日(土)

記事：植原 彰

今年2回目の訪花昆虫調査は賑やかでした。参加者は11人。プラスアルファ山梨CATVの取材がありました。みんなで自己紹介をした後、高槻さんから調査方法の説明がありました。説明が終わったと思ったら、高槻さんがバッグから何か取り出しました。まずは女性が頭に付けるカチューシャ・・・から2本の針金?が伸び、その先にかわいいポンポンが付いています。「これは・・・井上さんがいいなあ」と井上さんに付けていただきました。井上さんには、ピロピロ笛も渡しました。ピロピロ笛は吹くと伸び、吹くのを止めるとクルクルッと巻き戻りますよね。これはチョウチョを表しています。高槻さんご自身は、マスク・・・に何か仕掛けてあるものを取り出し、付けました。「私はハエです」。マスクに付いていたのは、ハエの口(の手作り模型)。人間の魂がハエに転送してしまうというSFホラー映画「ハエ男の恐怖(原題 The Fly)」がありました。そんな感じです。コロナウィルス流行時に多用されたフェイスガードにマジックペンで「サングラス」が描かれたものも装着。ハエの目です。さらに、紙皿で作った「浅い花」とペットボトルで作った「深い花」も取り出しました。もうわかりましたね。ハエの口では「浅い花」からは蜜が吸えても、「深い花」では口が届きません。一方、チョウチョの「ピロピロ笛」細長い口だと「深い花」でも蜜が吸えます。そのような花と昆虫の関係が、この調査からわかってくる・・・という説明のための小道具だったわけです。楽しかったですよ。



その後、5チームに分かれ、それぞれ巻き尺・ペグ・折り尺・記録用紙・調査マニュアルなどを持って、担当の遊歩道を歩きながら、花を訪れる昆虫を探し、記録していきました。遊歩道に沿って巻き尺を伸ばし、往路で遊歩道の右側2mの訪花の様子を記録し、復路は遊歩道の反対側を調べます。それが終わると、巻き尺を巻き取り、次の区間に進みます。

2023年の記録を見ると、6月90データ、7月299データ、8月2,268データ、9月1,297データですから、8月とその前後の調査は大変になりそうですが、6月は「楽勝」です。案の定、今回は調査員も多かったこともあって、午前中で終わってしまいました。次回からは記録するデータも多くなります。ぜひご参加ご協力を。

●訪花昆虫調査 7月●

7月13日(土)

記事：植原 彰

いつものように塩山駅で高槻先生をピックアップし、乙女高原へ。なんと12名もの参加者がいました。いつものように、高槻先生から調査の意義と方法を説明いただき、植原から班分けと担当遊歩道を発表。各班でパートナー同士あいさつをし、持ち物を確認して遊歩道に出発しました。

遊歩道に沿って巻き尺を伸ばし、終点から遊歩道の片側2m範囲の「花を訪れる昆虫」を距離・時刻とともに片っ端から記録していきます。そうやって巻き尺の始点に到着したら、今度は遊歩道の反対側2mを見ながら同じように記録していき、巻き尺の終点に着いたら1セクションが終了です。これを担当セクションの数だけこなします。花に来ている昆虫の観察には、パピリオ双眼鏡が大活躍です。

今回は調査員の人数が比較的多かったし、盛夏の花がわんさか咲く時期の手前だったせいか、午前中でなんとか全部の調査を終えることができました。

調査後は、いつものように、楽しく話をしながらお弁当を食べました。

私たち調査員が書いた調査票は高槻先生が一手に引き受けて、パソコンのエクセル表に入力し、それをもとに、花と昆虫の関係や、年による違い、季節(月)による違いなどを考察されていきます。

この調査は、そんな高槻先生の後ろ姿から、自然を対象にした調査・研究の在り方を学ぶ、またとない機会になっています。年寄りを排除する意はまったくありませんが(こんな書き方で申し訳ありません)、中高生・大学生で、特に自然を相手にしたことをやりたいなあ(仕事、プライベート、ボランティア含めて)と思っている人にぜひ参加してほしいと思います。



●訪花昆虫調査 8月●

8月18日(日)

記事：奥平めぐみ

8/17(土)に予定されていた訪花昆虫調査でしたが、台風接近による道路封鎖の為、翌日8/18(日)に実施されました。花を訪れる昆虫を見つけ、花、昆虫の種類、訪れた回数を記録する調査です。参加者は6名(うち子

供1名)。2人1組になり、3チームに別れて調査を行いました。開始時刻10時の気温は20度。盆地の暑さが嘘のように涼しく心地の良いスタートでした。

ノハラアザミ、タチフウロ、マツムシソウ、オミナエシ、ヤナギラン、カラマツソウ、ヒメトラノオ、ヤマハギ、シラヤマギク、タムラソウ、ノダケ、キオン、ツガネニンジンなどの多くの植物が花を咲かせていました。トラマルハナバチ、ミヤママルハナバチ、オオマルハナバチ、その他のハチ、ハムシ、アブ、甲虫類などが花々を訪れていました。

強い日差しが降り注いだと思ったら、ぱらりと雨粒が落ちてきたり、雲のご機嫌を伺いながらの調査でしたが、まとまった雨に降られることなく、14時頃調査を終えることができました。

調査の中で、虫たちの活動が午前中の方が活発のように感じました。調査箇所も違う為、明らかな比較はできませんでしたが、温度、湿度、天候、明るさ等の影響もあるのでしょうか。興味深く感じました。

今回の調査は、台風による林道閉鎖で日程変更があり、急遽参加させて頂くことができました。逆に、日程変更により参加できなかった方もいらっしやっただのではないのでしょうか。次回は、より多くの方が調査に参加できることを願っています。ご一緒させていただきました皆様に心から感謝いたします。



谷地坊主の観察会

●谷地坊主の観察会●

7月6日(土)

記事：植原 彰

7/6は年に一度の谷地坊主の観察会です。いつもなら午後までかけて行のですが、午後から雨予報となっています。この観察会は湿地の中にも入りますから、できれば雨は避けたくて、午前中にまとめて行うことにしました。参加者は6人でした。この観察会プログラムは3つのアクティビティから成り立っています。

その1 谷地坊主の湿地が見下ろせる、ちょっとした高台まで、遊歩道を歩いて移動しました。今の季節、谷地坊主を見てもボッサボサの草むらにしか見えません。ですから、秋・冬・雪をかぶったところ・春先・谷地坊主の「頭皮」から草の芽が出て来たころなどの写真を用意して、四季の変化を想像してもらいました。今度は、別の季節に来てくださいね。

そして、谷地坊主がどうして盛り上がっていくかを、紙芝居で説明しました。キモは「冬になると地面の中が凍って、土が持ち上げられる」ことと、「持ち上がった地面が、春先の雪解け水で流されてしまい、相対的に持ち上がっていく」ことです。冬に持ち上がった地面は春に元通りに下がるんだから、「だんだん」高くなることはないと思うのですが、このあたりのメカニズムは、自分もまだ理解できていません。

「冬、モーレツに寒いこと」「かといって、雪が降ったら、地面はかえって冷やされないのが谷地坊主はできない」「水の流れがあること」「かといって、流れが速すぎても、全部流れてしまうからNG」「地面が持ち上げられても切れない、密で強靱な根を持つ草(スゲ)が生育していること」などが谷地坊主発達の条件です。

ちなみに、ここ(アスファルト駐車場南。看板があるところ)の谷地坊主は山梨市によって**天然記念物**に指定されています。全国で、谷地坊主が天然記念物に指定されているのは釧路市と山梨市だけです。また、スゲ属植物に詳しい元神奈川県博学芸員の勝山輝男によると、タニガワスゲによる谷地坊主は乙女高原以外に見つからないのだそうです。

その2 高台から湿地まで遊歩道を降りて来ました。谷地坊主がすぐそばに見えます。参加者に茎に触ってもらいました。「断面は丸ですか?」茎が角張っていて、集中して触ると、断面が三角であることがわかります。そっと一株だけ残し、あとの葉を手でどかしてみると…株から葉が120°ずつの角度で(3方向に)出ているのがわかります。葉の感じはイネ科植物に似ていますが、イネ科は茎の断面が丸いのにに対して、スゲ属を含むカヤツリグサ科は三角です。『スゲ・カード』を使って湿地で他のスゲ属植物を探してもらいました。ゴウソ、オオカワズスゲ、オタルスゲなどが見つかりましたが、谷地坊主を形成していたのはタニガワスゲのみでした。

その3 別の沢に移動しました。ここも上から谷地坊主の湿地を眺めます。沢に沿って丘の上を移動していくと、途中から沢に谷地坊主がなくなります。「代わりに何が見えますか?」岩が見えるようになります。つまり、ここからは斜度がきつくなって、土が削られ、流されてしまい、岩が見えるようになっているということ



です。谷地坊主があるところは、決まって谷底の傾斜が緩やかで、土砂が平らに溜まっているところです。

湿地に降りて、すでに印がしている5つの谷地坊主の「身体検査」をしました。「髪の毛」が自然な状態で地上何センチか、幅は何センチか、「頭皮」までの高さや幅は何センチかを二人一組で計測してもらいました。

計測を始めて9年目になります、「本当に谷地坊主は生長しているのか」未だにわかりません。折れ線グラフを書いても不安定で、大きくなったり小さくなったり、中には小さくなるばかりの個体もあります。そもそも毎年測る人が違うので「計測誤差」がありますし、湿地にはまわりから土が流れ込んだり、反対に、流れ出したりしているので、地面の高さが一定とは限りません。「自然を知る」は一筋縄ではいかないですね。

とはいえ、9年もやっていると、おもしろい事実に出会うこともあります。「谷地坊主5号」は、年々、沢の流れが近づき、そのうち、水の流れに足元をすくわれて倒れ、行方不明になってしまいました。谷地坊主にもいろいろな「人生」があるんだなと思いました。

記事：伊佐治庸子

「キュロロン キュロロン チー」こんな特徴的な鳴き声で、ありがとう。私にも覚えられそう。因みにチーは付け加えなので小さく軽く。アカハラと言う鳥ですって。姿は見えなかったけれど次に聞いたら「アカハラが鳴いてる！」って誰かに教えてあげられるかも。そんなことを思いながらお目当ての谷地坊主の溜まりへ。

へえ、茎が三角なのがスゲ属の仲間の特徴なのか。三角なら丸よりも強いのかな？でも丸の方が風に折れにくい気がする。スゲ属はなぜ三角を選んだんだろう。それにしても谷地坊主が生まれるには、たくさんの条件が揃わないとこうはならないらしい。ここは奇跡の立地条件だったんだ！

身体測定の際にバディを組んだ加藤さんが、「あれ、ここにもある。」と谷地坊主1番さんのすぐ隣を指した。手でモゾモゾ1番さんの根本から触っていく。「これ、別の株だよ。」

あ、ああああ！そうか！ 「谷地坊主の英名が tussock で『かぶ』の意味です」と植原さんが出発前に話してくれた。なぜカブなんだろうと思っていた。葉っぱもカブの葉とは似ても似つかない。頭の中はずっと???だった。「蕪」じゃなくて「株」なんだ！ それからは自分の思い違いを思い出すたびに笑いが込み上げてきて仕方がなかった。アハ体験山盛りの、初めての乙女高原だった。



記事：加藤由美

谷地坊主の観察に行きました。谷地坊主という響きに惹かれてちょっとだけ調べて、春先のたくさんの鬼太郎が露天風呂に浸かっている姿(写真)にますます惹かれて会いたくなり会いに行きました。雲行きは怪しい曇り空。雨が降りそうな空模様。でも、体感温度は寒くもなく暑くもなく丁度いい感じです。

出発前に植原さんから「谷地坊主は英名が tussock 『カブ』の意味です」と聞いて「カブ(蕪)?なぜカブ?」と思ったのは私と伊佐治さんだけでしょうか？

「キュロロン、キュロロン、チー」という可愛いくも逞しい縄張り宣言(?)のアカハラの声や、里よりも鮮やかに咲くアヤメやアザミを眺めながら湿地帯に向かいました。

「これが谷地坊主です」と緑一面の湿地帯を指す植原さん。「???どれ?」とよーく見ると緑の塊が見えます。そう！谷地坊主の頭に緑の髪の毛(スゲの葉っぱ)が生えてモジャモジャ頭になってた！！

谷を降りスゲ属の調査。茎を触ると「あれ？三角？まるじゃない！」とスゲ属の不思議を発見。

そして、谷地坊主の身体測定に。1号から5号まで札の付いた谷地坊主を2人1組で調査開始。1号を調査中「この子、どこまで？1号さん」と緑の髪の毛をかき分けモゾモゾ手探り。「あ、これ、別の株だよ」と私。「あ、ああああー！カブってそっち?」とバディを組んだ伊佐治さん。tussockが『蕪』ではなく『株』だと気づき、大爆笑の2人。隣にいた小さな谷地坊主さんありがとう、あなたのおかげで謎が溶けたよ。

夏の案内人活動

7月21日

記事：鈴木辰三

10時前に到着すると10人ほどの団体がベンチに腰掛けておしゃべりをしていました。準備をしながら様子を見ていましたが30分近く動く気配がなかったので、声をかけてみると“野鳥の会 甲府支部”の方々でした。

探鳥会に来たけど鳥がほとんどいないので涼んでいたとのこと。何名かの方は植原さんのことをよくご存知でしたよ。見ごろの花や鳥のことなど10分ほどお話ししながら、フィールドガイドをお渡ししました。また時々来られるそうです。

その後しばらくロッジ前で待機していましたが人影なし。乙女高原も久しぶりだったので、作戦を変えて散策しながら訪問者を探すことにしました。花を見に来ていた様子のカップルに出逢ったので、フィールドガイドで見ごろの花をご案内。せっかくなのでマルハナバチの話もしながら無理やりフィールドガイドを渡したら、意外に関心を示していました。

その後他に訪問者はなく、午後予定があったため13時ごろには切り上げました。あまり活動らしい活動はできませんでしたが、久々に花盛りの乙女高原を満喫できて良かったです！

夏の案内人活動日

- ① 7月20日(土)
- ② 7月21日(日)
- ③ 7月27日(土)
- ④ 7月28日(日)
- ⑤ 8月3日(土)
- ⑥ 8月4日(日)

7月27日(土)

記事：角田敏幸

毎年恒例の夏の案内活動に7月27日に出かけて来ました。朝10時の気温は22℃でとても涼しい乙女高原グリーンロッジ前でした。11時40分頃までにバイクが5台通過したのみで一人も乙女高原を訪れる方はいませんでした。持参した雑誌を読みながら下界の暑さは今日も30℃超えて暑いだろうと思いつつ過ごしていると、世話人の井上さんが車で手を振って車から降りて来て下さいました。翌日の乙女高原案内人養成講座の下見ですと言って訪れて来ました。



しばらく2人でお茶しながら雑談し、今日は夏休みなのに何故乙女高原には人が来ないだろう。原因はオリンピックの開会式の再放送を観ているのでは。そうこうしている内に12時近くになり、またも世話人の芳賀さんが様子を見に来て下さいました。すると、案内人養成講座を受講中の宇津さんも顔を出して下さいました。早朝から蝶を観に来られたようです。

しばらく井上さんと乙女高原グリーンロッジ前を優雅に舞っている蝶の話。その後、井上さんは明日の準備で草原内に。戻って遅い昼食を食べてまた、宇津さん、井上さんは調査に、芳賀さんも帰り、私は夏の案内人活動と翌日の案内人養成講座に使うロッジ内を清掃。この日は15時まで3組来たのみ、その内の一組(甲州市)の方がファンクラブに入会して下さいました。

例年とまた違った1日でした。

8月4日(日)

記事：古屋由紀子

第5期乙女高原案内人養成講座を無事終了した翌週の8月4日(日)、早速「夏のボランティアガイド」に参加しました。「養成講座を終了した」と言っても、乙女高原については「ほぼ初心者」状態の私ですので、今はボランティア活動の入り口にやっと立たせていただいたという感覚です。ベテランの角田さん、井上さんのご指導の元、案内人のワッペンや調査・作業中の腕章をつけることから始まり、案内テーブルやイス、案内チラシ、植物昆虫図鑑等の書籍の置き場所からディスプレイ等、基本的な流れを教えてくださいました。

準備する間にも、角田さんと井上さんは、「このカミキリムシの名前は何か？」とか、「ネジバナが咲いているよ」とか、今朝出会った自然への好奇心が止まらない様子です。次から次にお二人の間で交わされる「乙女高原の8月4日10時の自然観察とその新鮮な心の動き」に、私は感動していました。ちなみにカミキリムシは「シラフヒゲナガカミキリ」でした。

とはいいつつ、私もお2人の観察力に自然に引き込まれ、図鑑のページを括ってカミキリムシの名前を調べたりネジバナの螺旋の茎に可愛く咲いている小さい桃色の花に見入ったりしていました。

今日の活動のミッションは、「高原に生えている外来植物の駆除」でした。ロッジ方面から高原を見ると、紫色のヤナギランの奥に黄色が一面に広がっています。角田さんから「メマツヨイグサ」と教えていただき、初めて高原のロープの中に入りました。このメマツヨイグサとヒメジヨンを根から抜きながら進み、45リットルのゴミ袋が一杯になった時点で休憩。2人とも抱えきれないくらい沢山の茎を抜いたのですが、ロッジから見るとまだ黄色い面積が広く残っており、メマツヨイグサの旺盛な繁殖力を感じました。



昼食が終わる頃、段々に北側の空模様が怪しくなり、ついにぽつぽつと雨が降ってきたため、案内テーブルをロッジの入り口に移動して、案内を続けました。この日はパリオリンピック会期真っ最中であつたせいか、日曜日にも拘わらず来訪者は3組でした。その内、南アルプス市の女性お2人と甲府市からの女性お1人がファンクラブに加入して下さいました。

甲府市の女性は寄付もして下さいました。乙女高原には何度も訪れていて植物の観察がお好きとのこと。会話が弾み、珍しい植物の観察に角田さんの案内で再度高原に入って行かれたため、私も勉強のため同行させて頂きました。歩きながらのお2人の会話は、植物名は私にはまだ良く分からず、「ふーん」「へー」の連続でしたが、話の波長がぴったり合っていて、とても心地良さを感じました。

初めて出会った方とでも「乙女高原」「植物」という共通の知識や経験値があると、昔からの友人のような軽やかな関係になれるんだなあ、と感じました。

後で角田さんから「これがインタープリンター（の活動）だよ」と教わりました。私はまだ見て、体験して、覚えて、の時期なので、しっかり体験していこうと思いました。

午後の活動で再度メマツヨイグサの駆除に取り掛かろうとしたとたんに、雨が降りになってきたため、この日の活動は14時までとして終了しました。

休憩中にも、ロッジ内や裏側を見せていただきましたが、その間もルリボシカミキリの交尾の様子や、キベリタテハが舞いながら屋根や床や壁に止まり、綺麗な縁どりのある羽を公開してくれる様子が観察できました。

短い時間でしたが、沢山の情報が一度に入ってきて普段使わない部分の脳が活性化されたようで、ボランティア活動の良さを多方面で実感した一日でした。ありがとうございました。



TOPICS

◆町の駅やまなし常設展示

JR 中央線・山梨市駅北口にある「街の駅やまなし」のスペースをお借りして、乙女高原展を開催しています。掲示板1枚と長机1脚だけのミニミニ展ですが、毎回テーマを決めて1~2か月程度で展示替えしてきました。ただいまシーズン44「植物たちのライフステージ」展を開催中です。山梨市駅近くにおいでの際は、覗いてみてください。

◆今後の活動予定

●草刈りボランティア

日時：11月23日(土/祝)9:00~12:00
集合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：水分、帽子、昼食、おわん、箸(豚汁用)

●訪花昆虫調査

～花と昆虫のリンク(つながりの数)を記録～
日時：10月5日(土)9:40~15:00(予定)
雨天の場合6日(日)
集合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：弁当・水筒・雨具(防寒着)

●自然観察交流会

日時：10月5日(土)は訪花昆虫調査に変更
詳細上記。9:40 乙女高原集合
11月16日(土) 草刈りボランティア準備
集合は9:00 乙女高原

2024年12月7日(土)
2025年1月11日(土) 2月1日(土) 3月1日(土)
集合：道の駅牧丘はなかげ 9:00
持ち物：弁当・水筒・雨具(防寒具)

●乙女高原フォーラム

日時：2025年1月26日(日)13:00~15:30
集合：(仮)夢わーくやまなし
ゲスト：高槻 成紀さん
テーマ：(仮)柵で囲って10周年 ～虫も戻ってきた乙女高原～

時標

私たち乙女高原ファンクラブは本年度、乙女高原案内人養成講座を開催しました。修了者に乙女高原案内人として登録いただき、活動にボランティアで参加してもらおうというものです。公募し、23人が受講しました。5月30日(土)に開催された乙女高原案内人養成講座の模様を振り返ります。乙女高原案内人養成講座は、乙女高原案内人の養成と、乙女高原の自然保護の推進を目的として開催されています。乙女高原案内人の養成には、自然保護の知識や実践的なスキルが必要とされています。乙女高原案内人の養成には、自然保護の知識や実践的なスキルが必要とされています。乙女高原案内人の養成には、自然保護の知識や実践的なスキルが必要とされています。

「人財」育み自然守る活動継承



植原 彰
乙女高原ファンクラブ代表世話人

その他にも、乙女高原の自然を多くの人に知ってもらうために、乙女高原を守る輪に加わってもらうために、多彩な活動を計画・運営しています。活動を長く続けると、スタッフの高齢化が進みます。また、途中から参加して下さる方もいるのですが、去つていく方もいます。持続的に自然を守る活動を進めるには、「人財」確保の手立てが必要とされています。考えた末に実行に移したのが、乙女高原の活動者による「人財」育成講座です。この養成講座は、乙女高原案内人の育成と、乙女高原の自然保護の推進を目的として開催されています。乙女高原案内人の育成には、自然保護の知識や実践的なスキルが必要とされています。乙女高原案内人の育成には、自然保護の知識や実践的なスキルが必要とされています。

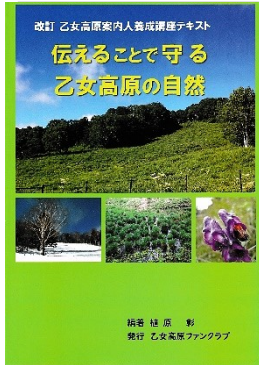
うえはら・あきらさん 1962年山梨市生まれ。2001年に発足した乙女高原ファンクラブ代表世話人・乙女高原案内人。日本自然保護協会理事、自然観察指導員、自然観察指導員講習会講師。著書に「伝えることで守る乙女高原の自然」(乙女高原案内人養成講座テキスト)など。元小学校教員。

2024. 9. 15

2024年9月15日付け山梨日々新聞より

●多くの方の記事を載せることができた今号、編集を井上敬子、校正を鈴木辰三さん・植原彰さんが行いました。その後、三枝かめよさん・芳賀月子さんの印刷、芳賀さんの発送作業を経て、約320通が皆さまのもとに届けられます。

乙女高原ファンクラブの刊行物



NEW!! 乙女高原案内人養成講座のテキスト 『伝えることで守る 乙女高原の自然』

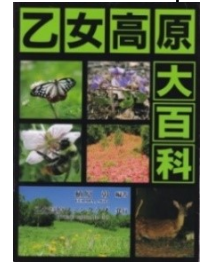
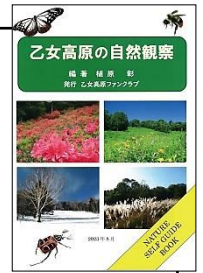
(A4判 270頁 2024年)モノクロ。2006年テキストの増補改訂版。頒価 1,500円。送料は1~2冊370円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原を歩く際のお供に『乙女高原の自然観察』

(A5判 30頁 2023年)オールカラー。1ページに1テーマ。頒価300円。送料は1冊:140円、2~8冊:180円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原とファンクラブ11年間の集大成『乙女高原大百科』

(A5判 602頁 2013年)乙女高原メールマガジン11年間の中身を編集した厚さ3cmの本。一部カラー。頒価2,000円。送料は1~2冊なら370円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。



乙女高原フィールドガイド シリーズ

…欲しい方は事務局までご連絡ください



フィールドガイドⅢ スミレの観察のおともに
『乙女高原のスミレ・ウォッチング』

→在庫切れ

フィールドガイドⅡ マルハナバチ観察と調査のおともに
『マルハナバチウォッチング 改訂新版』

フィールドガイドⅠ 春から夏にかけて咲く草花のガイド
『乙女高原のお花たち 第三版』

いずれもA3判。両面カラー。折りたたみ済み。ポケットに入れられるサイズになっています。

■乙女高原ファンクラブの普通会員になりませんか？

『数は力』という側面もあります。ファンクラブの会員が多くなれば、それだけ乙女高原の保全に対するファンクラブの発言力が増します。まわりの方をファンクラブに『巻き込む』ことも乙女高原を守る活動の一つです。まわりの方にファンクラブをお勧めください。

乙女高原ファンクラブに入会するには…「入会します 氏名・郵便番号・住所・電話番号」というファックス、メール、手紙等を事務局までお届けいただければ、いつでも、だれでも会員になれます。

- ・入会金も年会費もありません。乙女高原を守る力が1人分、大きくなります。
- ・普通会員には年4回、サポーター会員には年1回、ニュースレターが届きます。

今号は普通会員のみにお送りしています。

■乙女高原ファンクラブへの連絡先■

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3

TEL 090-7246-8625 FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp

※会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。

WEB <http://fruits.jp/~otomefc/>

●郵便振込● (番号) 00220-8-71093 (加入者名) 乙女高原ファンクラブ

●ゆうちょ銀行●店名: 029店「当座預金」番号: 0071093 加入者名: 乙女高原ファンクラブ



ホームページ



観察ブログ



活動ブログ



乙女高原後援会
フェイスブックグループ